第Ⅰ部

解説

この部では，2006 年 9 月 16-17 日に大阪経済大学で開催された経済統計学会全国研究総会の際に，２つのジェンダー統計セッションでの，それぞれ 3 報告とコメントから，報告された 6 つの報告すべてを収録させていただいた。本所報への収録にあたっては，報告者による一定の補強が加えられたものもある。

このジェンダー統計セッションは，この学会に 2001 年に設置された「ジェンダー統計研究部会」が中心になって，設立以来，全国研究総会に向けて組織・開催している。2006 年度のセッションでは，ジェンダー統計が，国際活動と，日本の全国レベルと同時に地方レベルでの活動にも論点を広げて，とりあげられた。この研究部会のメンバーのかなりが参加してきた NWEC 編の『男女共同参画統計データブックー日本の女性と男性』の 2003 年と 2006 年版の出版等によって，不十分ながら日本の全国レベルでの研究は一定の前進を得たと考えて，国際交流・国際発信，そして地方ジェンダー統計に着目しているからである。

論文１は，国連統計部による『世界の女性 2005－統計における進展』の 6 人の訳者による翻訳の総括･整理を担われた伊藤彰彦氏によるもので，この書物の特徴づけをし，自ら参加されている統計での海外支援一般を論じられている。国連の『世界の女性』は，北京女性会議に向けた 1993 年版以降，1995 年版，2000 年版といずれも，国際的な最重要基準文献の１つであるが，日本統計協会が継続的に日本語訳を担当されてきた。

論文２は，世界経済フォーラムのジェンダー・ギャップに関する指数を杉橋やよい氏がとりあげたものである。現在，ジェンダー格差の国別比較等で最もひんぱんに使用されているのは，UNDP のジェンダー･エンパワーメント尺度（GEM:Gender Empowerment Measure）である。しかし，この尺度に対しては，統計専門の分野からは，単純化･一面化が著しい点への批判がある。これに代替する総合指標がありうるのかは，ジェンダー統計研究の一課題である。この問題にかかわって，ジェンダー･ギャップ指数が検討されている。

論文３は，中国のジェンダー統計に関する秦小リツ氏のものである。秦氏は，1995 年度に『1990 年以降の中国都市部における失業者の統計的研究　－ジェンダー統計の視角をふまえて－』によって，法政大学大学院経済学専攻において博士学位を得た後，法政大学の交換研究員としての在籍された 2006 年度の前半に，検討を中国のジェンダー統計一般にさらに広げられた。これは，関連プロジェクトの中国全国婦女連研究所や国家統計局との意見交換等を経ての作品である。

論文４は，日本のジェンダー統計研究の拠点となり，活動の柱とされてきた独立行政法人女性教育会館(NWEC で，自らの研究と同時に，館における男女共同参画統計の研究や学習･研修を総括的に調整されてきた中野洋恵氏による，館の活動の紹介である。ここでは

NWEC の「女性と家族に関する統計データベース」が紹介され，最終ページにそのトップページの画面が紹介されている。幾つかの補強修正を経て改善されてきたこのサイトについては，関係者･関心ある方々による一層の注目と活用を望みたい。

論文５は，NWEC『男女共同参画統計データブック』で，「家計と資産」を担当されている天野晴子氏によるもので，ジェンダー統計視角からの検討を，家計と税・社会保障との関連に広げて論じられている。

論文６は，日本におけるジェンダー統計作業と研究の重要な焦点が，地方ジェンダー統計であるという認識のもとに，都道府県と政令指定都市についての調査結果とウエブサイトの検討を通じたジェンダー統計書の論評にあてた伊藤陽一のものである。この後，伊藤を中心とする地域ジェンダー統計の検討は，市区レベルに進められているが，ここでは報告時に配布したものをそのまま収録している。